Title	イギリス短期留学記 ： キール、アムステルダム、ケンブリッジ
Author(s)	豊川，慎
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.3 : 27-30
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3526
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

イギリス短期留学記
—キール、アムステルダム、ケンブリッジ

豊川　慎

この度イギリスに短期留学する機会を与えられ、博士論文で扱ったA.D.リンゼイの政治思想に関する更なる一次資料の収集を第一の目的に、この夏の二か月ほどの間、主にケンブリッジで研究の時を過ごした。以下紙数の許す限り、夏の研究滞在の報告をしたい。

8月1日の早朝の便で羽田からロンドンに飛び、同日にロンドンから最初の目的地であるキール大学があるストーク・オン・トレントに向かった。キール大学の図書館にはリンゼイが家族に宛てた直筆の手紙や未公表草稿の数々、またリンゼイが投稿した当時の新聞記事の切り抜きなどの膨大な一次資料が保管されている。特別保管所（special archives）の一室で「A.D.Lindsay Papers」と呼ばれるこれらの一次資料に沈潜しつつ、リンゼイの生涯と思想を直に感じ得る喜びを味わった。

「リンゼイ・ペーパーズ」の資料番号は通しで249番まであり、その一つ一つには多いもので50以上の手紙などが含まれているから、資料の数としてはまさに膨大なものである。「一覧表」（Lindsay Papers： A Handlist）を参照しつつ、可能な限りすべての資料に目を通し、どの資料をコピーするかを選別して行く連日の作業は誠に楽しいものであった。スペシャル・アーカイブズの資料は自分でコピーが出来ず、すべて司書の方にお願いしなければならないことになっていたため、司書のヘレン・バートンさんには私のために多くの時間を割いて頂くことになり、大変お世話になった。この場を借りて感謝申し上げたい。

フランスの哲学者ベルクソンがリンゼイに宛てた手紙（Lindsay Papers. 144番）

10日間ほどキール大学に滞在した後、ストークの町からロンドンを経由してケンブリッジへと移動した。その直前にはロンドン郊外で暴動が勃発していて、瞬く間にロンドン以外の町でも暴動が次々と連鎖的に飛び火し、テレビのニュースは特別番組で連日その様子を中継していた。ロンドンを経由してケンブリッジに行く予定ゆえに、ロンドンで何が起こっているのかを理解すべく不安な思いでテレビニュースを見ていた。報道では、黒人青年が警察に射殺されたことに抗議する穏便なデモから一転して若者たちが暴徒化したことが伝えられていたが、多くの解説者の説明によれば、射殺という出来事が引き金となって、イギリス社会がこれまで構造的に抱えて来た失業問題、家庭環境問題、経済格差問題、教育問題、社会道徳問題などの社会の歪みとそれに対する若者の憤りが一挙に噴出したのだという。ツイッターなどのソーシャルメディアの使用がそれに拍車をかけ、暴徒の連鎖と化したのであった。ロンドンに端を発した今回の暴動のニュースを見ながら考えさせられたことは、リンゼイが1920年代30年代に主に取り組んだイギリス社会の失業問題と彼が広く社会に訴えたその解決策に関してである。リンゼイによれば、失業問題の根本的解決には社会から自分は不要とされているという疎外感を持っている人々に対しての寄り添い、共感、想像力などが欠かせない。他者の受容、隣人愛の実践である。ちょうど今回の研究滞在の際にリンゼイが1934年に出版した*Christianity and Economics*（豊川慎

ニコラス・ウォルターストルフと筆者。アムステルダム自由大学にて

訳『キリスト教と経済』聖学院大学出版会刊行予定）の訳文の見直しをも進めていたのであるが、この本は今なおイギリス社会において読まれるべきものだと思ったものであった。

さてケンブリッジで数日過ごした後、オランダのアムステルダム自由大学で開催されるキリスト教哲学の国際会議（International conference on the occasion of the 75th anniversary of the Association for Reformational Philosophy）に出席するため、アムステルダムへと向かった。ニコラス・ウォルターストルフ（Nicholas Wolterstorff）など著名な哲学者や神学者が世界中から150人近く集い、「創造の秩序の将来」（The Future of Creation Order）というカンファレンスのメインテーマのもと、神学、哲学、社会学、自然科学、生物学、物理学、法学など様々な分野から活発な討議がなされた。カナダのトロント留学時代の恩師たちやアムステルダム自由大学哲学部留学時の恩師たち（Dr. Sander Griffioen, Dr. Henk Geertsema, Dr. Govert Buijs）と久しぶりに再会出来たことも感謝であった。

国際会議の開会時にはオランダのキリスト教民主同盟のバルケネンデ前首相（元アムステルダム自由大学教授）が講演し、その中で氏はイスラム移民に伴うオランダ社会における寛容の問題、他者との平和的共存の重要性を強調していた。リンゼイには『寛容とデモクラシー』と題する書物があるが、まさにグローバル社会における喫緊の課題として寛容とデモクラシーについて私たち一人一人が真摯に考えなければならないことをあらためて思わされた次第であった。

アムステルダムでの週末にはかつて留学中に毎週午前と午後に通っていた二つの教会に久しぶりに出席することが出来た。午前中はThe English Reformed Churchに、そして午後はオランダ日本語キリスト教会アムステルダム集会に出席した。アムステルダムにあるThe English Reformed Churchの歴史は400年以上と古く、17世紀のピューリタン達に遡る。礼拝の際、教会堂のピルグリム・ファーザーズを記念する大きなステンドグラスに目を向けながら、信教の自由を希求したピューリタン達に思いを馳せる時であった。

自由大学での国際会議の後、アムステルダムから空路でイギリスに戻り、その後再びケンブリッジで研究の時を過ごした。ケンブリッジ大学図書館に連日通い、リンゼイに関する資料の収集やピューリタニズム研究に関する文献のリサーチなどを行った。

研究滞在先としてケンブリッジを選んだ理由の一つはケンブリッジにはトロント留学時の指導教授であった恩師のジョナサン・チャプリン氏（Dr. Jonathan Chaplin）がおられ、私が現在取り組んでいるキリスト教とデモクラシーに関する研究へのアドバイスを頂くためである。チャプリン先生はキリスト教政治思想、政治神学、キリスト教社会政治倫理の専門家で、キリスト教学術研究所大学院（Institute for Christian Studies, Toronto, Canada）で政治理論を教えた後、現在はケンブリッジ大学神学部のメンバーであると同時に、聖書研究で知られるティンダル・ハウス（Tyndale House）内のキリスト教倫理研究所（The Kirby Laing Institute of Christian Ethics）の所長（Director）を務めておられる。チャプリン先生から学問的な教示を得ながら、ケンブリッジで研

パトニーの聖マリア教会内にあるトマス・レインバラの言葉.

究を進めることが出来たのは幸いであった。

さて紙数の関係上、この度の研究滞在の成果は他の機会に論文という形でまとめることとし、以下において、滞在時に訪れたいくつかの場所を紹介することにしたい。

リンゼイは17世紀イングランドのピューリタニズムに近代デモクラシーの源泉を見、特にその著『民主主義の本質』においてはピューリタン革命期の議会軍総評議会が『人民協約』などをめぐって討論したいわゆる「パトニー討論」の意義を強調したものであったが、1647年にこの討論がなされたロンドン郊外のパトニー（Putney）にある聖マリア教会（St. Mary's Church）を実際に訪れてみた。教会堂の中には「パトニー討論1647年―クロムウェルとデモクラシー」（The Putney Debates： Cromwell and Democracy）と題する展示コーナーが常設されていて、パネルや映像によって当時ここでどのような討論が行われていたのか、またその現代的意義とは何かということを知ることが出来るようになっている。教会堂にはトマス・レインバラ大佐（Colonel Rainborough, 1610-1648）の次の言葉が掲げられていた。「確かに、イングランドに住む人は、たとえどんなに貧しくとも、最も富裕な人と同じく、生きるべき生命をもっていると思う」（FOR REALLY I THINK THE POOREST HE THAT IS IN ENGLAND HATH A LIFE TO LIVE AS THE GREATEST HE）。このパトニーの教会の牧師いわく、教会に掲げられているこの言葉は聖書の言葉ではないが、聖書の本質を表しているものだという。

このパトニー討論の速記録を含む膨大な「クラーク文書」（*Clark Papers*）は現在オクスフォード大学のウスター・カレッジ（Worcester College）の図書館に保管されている。司書のジョアンナ・パーカー氏（Dr. Joanna Parker）に連絡を取り、歴史的にも貴重なクラーク文書を見せて頂いた。ウスター・カレッジのスペシャル・アーカイブズの一室で上記のレインバラの言葉を実際に確認したり、1647年の『人民協約』などの文書を手に取って読み、近代デモクラシーの展開にとって重要であった歴史的文書の数々に直に触れる機会を得た。

オクスフォードでの滞在時にはベイリオル・カレッジも訪れた。リンゼイは若き時はベイリオルのフェローを、そしてその後は長きにわたって学寮長を務め、ベイリオルはリンゼイがその生涯の多くの時を過ごした場所であった。リンゼイを含む歴代の学寮長の絵が飾られているホールや彼がそこで頻繁に説教を行ったチャペルなどを訪れたが、そのチャペル通路には第一次世界大戦と第二次世界大戦で犠牲となったベイリオル・カレッジの学生の記念碑が埋め込まれていて、第二次大戦

リンゼイが長く学寮長を務めたベイリオル・カレッジ

クロムウェルの家の中

時には300名以上のベイリオルの学生が亡くなったという。優秀な学生たちが戦争の犠牲となり、そのことに学寮長として心を痛めたリンゼイの苦悩を感じる思いであった。

ケンブリッジからそれほど遠くないイーリー（Ely）の町にはオリバー・クロムウェル（Oliver Cromwell, 1599-1658）がかつて住んでいた家があり、ここではクロムウェルに関する非常に充実した内容の展示がなされていた。展示説明の最後に、「ではあなたにとってクロムウェルとは英雄か独裁者か」を投票するコーナーがあり、私は少し考えた後「英雄」に投じた。見たところ、７対３程の割合で英雄が多数を占めていた。

クロムウェルがかつて学んだケンブリッジのシドニー・サセックス・カレッジのチャペルを訪れるとそれはまさにかつてピューリタンの温床と言われたカレッジだけあって他のカレッジとの違いがそのチャペルの質素な内装によく表れていた。ここにはクロムウェルの頭蓋骨が埋葬されていた場所という銘も掲げられている。ケンブリッジ大学のもう一つのピューリタンのカレッジとしても知られるエマニュエル・カレッジのチャペル内にあるピューリタンたちのステンドグラスもまた見事なものであった。

ケンブリッジではEmmanuel Reformed Churchという教会に毎週出席したが、他のキリスト教の伝統を知る機会でもあると思いギリシャ正教の礼拝にも参加してみた。聖画像（イコン）に口づけをする人々、奥の方で何の儀式を行っているのか、いつまで立ち続ければいいのか分からずまたいつ終わるともしれない礼拝は同じキリスト教であるとはいえ思っていた以上にプロテスタントの礼拝とは非常に相違したものであった。プロテスタント内にもルターとツヴィングリの聖餐論争を初め、聖餐をめぐる神学的理解には相違があり続けているが、そのような相違をはるかに超えた相違点を実感する機会となり、礼拝と礼典に関してあらためて考えさせられた貴重な時となった。

ケンブリッジには1130年に創建された珍しい円形の「ラウンド・チャーチ」として知られる古い聖墳墓教会がある。現在、「クリスチャン・ヘリテージ」（Christian Heritage）という団体がその管理を担っているのであるが、日本の大学でキリスト教倫理などを教えていることをその団体の創設者の方に告げると、非常に関心を持って下さり、教会の奥の一室でゆっくりと話をする機会を持った。話を聞くとその方（Ronald Macaulay氏）は日本でもかつて知られたフランシス・シェーファーの義理の息子であると言い、自分の妻はシェーファーの娘だという。日本でもシェーファーの本はこれまで数々が訳され出版されてきたことを伝え、日本にもラブリのような若者が集う場所があればという話で盛り上がった。日本に帰る前日の全く偶然の出会いではあったが、実り多い会話の時であり、共に祈って別れた。

今回の研究滞在では、ケンブリッジ大学図書館などでのリサーチと合わせて、多くの人と出会いそして多くの対話や議論の時をもつことが出来、大変充実した実り多い研究滞在の時を過ごすことが出来て感謝であった。このような研究の機会を与えて下さった聖学院大学総合研究所所長の大木英夫先生にこの場を借りて心よりの感謝を申し上げたい。

（とよかわしん・聖学院大学総合研究所特任研究員）